［翻訳］

スラヴ神話(4)

アレクサンデル・ブリュクネル
長谷見一雄・三浦清美・三好俊介・熊野谷葉子・
寒河江光徳・小椋　彩・柿沼伸明・鳥山祐介　訳

凡例

本稿はポーランドのスラヴ文献学者アレクサンデル・ブリュクネル Aleksander Brückner (1856–1939) の『スラヴ神話』*Mitologia słowiańska*（全 10 章，クラクフ，1918）第 4 章の翻訳である（第 1 章～第 3 章の翻訳はそれぞれ『SLAVISTIKA』XIII～XV に掲載した）。ブリュクネルのこの著書および翻訳のための底本（*Mitologia słowiańska i polska*, Warszawa: PWN, 1980）の詳細については，『SLAVISTIKA』XII 所収のスタニスワフ・ウルバンチク論文「アレクサンデル・ブリュクネルとその神話学の業績」のわれわれによる翻訳と「ブリュクネル・ウルバンチク・スラヴ神話――訳者付記」を参照されたい。

検索の便を考え，初出の人名，文献名には原綴りを脚注ないし本文で併記した。

また，原語そのものが問題とされる場合にも，煩瑣にならない程度に原綴りを併記した。

脚注は 3 種類ある。便宜上，大半を占めるウルバンチクによる編者注を参照数字のみで示し，ブリュクネルによる原注には「*」を，訳者たちによる訳注には「†」を，それぞれ参照数字の後に付した。なお，単に引用文のポーランド語訳を示すために付されただけの編者注は省略した。また，訳注は文意を理解するために必要な最小限のものに限定し，前号までの翻訳分と重複するものは省略した。

［ ］で囲まれた記述はウルバンチクによる補足，〔 〕で囲まれた記述は訳者たちによる補足をそれぞれ示す。

IV. スヴァローグ＝ダージボグ

ネストルによるヴラジーミルの神々の聖者表はスヴァロージチではなくダージボグをあげているが，マララのルーシにおける注釈はそれをスヴァローグの子，スヴァロージチのことだと断言している。ティートマルとブルーノが[1]11 世紀初めにルチク族[2†]＝レダル族の間に見られるその名を書き留め，レダル族の最高神と認めたこの神について，どのように考えるべきなのか？　この名前は西方ではすぐさま消滅し，12 世紀にはすでにいかなる文献も伝えていない。オーデル川流域とルーシにおけるこの神の名称の同一性はきわめて意義深く，他の同様の比較をも可能にする全権をわれわれに与えるほどのものなのであるが，ヤーギチは，オーデル川流域の名称が船でノヴゴロドへたどり着き（!!），そこからルーシの年代記作者のもとに及んだという推測のもとに，スラヴ神話学の領域における最も重要な事実であるこの同一性の意味を弱めようと無駄骨を折った。この不幸きわまりない着想をヤンコも受け売りして次のように述べている[3†]。「だがルーシのスヴァローグとその息子たる太陽神スヴァロージチに，古代ギリシャの鍛冶の神ヘーパイストスに関する説話と合致するものがあるとみなそうとしたのは，ヤーギチの機知に富んだ評[4]によれば，学識あるルーシの純然たる策略にすぎず，彼らルーシ人たちは，本来は栄誉ある祖先で，後にスラヴ人のレダル族の軍神となったスヴァロージチの名で知られていた，バルト海沿岸地方からルーシへと運ばれたこの神の名を，自分に納得できるように説明したかったのである。」

---

[1] ティートマルについては前記〔第 1 章（『SLAVISTIKA』XIII，300–301 頁）〕を参照。ブルーノはケルフルトの聖ブルーノ Bruno z Querfurtu を指す〔974 頃–1009，神聖ローマ皇帝オットー 3 世の司祭で，大司教に任ぜられ，ルチク族の改宗に当たった〕。彼の没後残された手紙では，皇帝ハインリッヒ 2 世がキリスト教徒ボレスワフ勇敢王に抗して，スヴァロージチ崇拝者である異教のヴィエレト族と同盟したことを非難している（1008 年）。

[2†] 原語は Lucice。同義のポーランド語（複数形）にはほかに Lucicy，Lutycy，Lutykowie，さらに Wieleci があり，ステファン・キエニエーヴィチ編『ポーランド史 1，2』（恒文社，1986）では，最後の語に「ヴェレティ族」の訳語を当てている（本稿では単数形 Wielet から前注のように「ヴィエレト族」とした）。Lucice については，『SLAVISTIKA』XIV，111 頁脚注で「ルチツ人」と訳語を改めた旨を述べたが，原語の単数形（Lucik）を考慮して再度「ルチク族」に訂正することとする。なお，「レダル族」（Ratarowie または Redarowie）はルチク族中の主要な一民族である。

[3†] 『スラヴの先史時代について』を指す。第 1 章（『SLAVISTIKA』XIII，303 頁，ウルバンチクによる脚注）を参照。

[4] V・ヤーギチの前掲論文「神話学大要」*Mythologische Skizzen* 中の評。〔第 2 章（『SLAVISTIKA』XIV，113 頁）を参照。〕

ルーシのマララース[1]とその後の『イパーチイ年代記』は，スヴァロージチについて次のように述べている[2]。「洪水と人々の離散の後，エジプトを最初に統治し始めたのはメストロムであった（名前そのものがそれを証明している）。彼の後にイェレミイ（ヘルメース）が，ついでフェオスト（ヘーパイストス）が選ばれ，このフェスト（！）をエジプト人たちは神と呼んだ（彼の時代に天から鋏（やつとこ）が落ちてきて，昔ながらの石と棒の代わりに武器の鍛造が始められ，また彼はそれまで全く自由に暮らしていた女たちに一人の夫とだけ結婚するよう命じ，女がその禁止に背けば死刑を言い渡した）。スヴァローグとも呼ばれていたフェオストの死後，エジプト人を統治したのはその息子の太陽（ヘーリオス）で，彼はダージボグと呼ばれた。太陽王にしてスヴァローグの息子たるこのダージボグは力強い男であり，父スヴァローグの掟を破ろうとは思わなかった（…）。詩人ホメーロスは彼について，ダージボグはアフロディーテーを非難したと言った（…）。スヴァローグの息子ダージボグの死後支配したのは」云々。『イパーチイ年代記』は 1114 年の項で同じことを繰り返しているが，それはラドガ湖周辺で広まっていた，動物等が天から降ってきた（したがって例の鋏（やつとこ）も落ちてきた）という作り話のためである。とはいえ，『年代記』のテキストもいくつかの挿入がないわけではない。フェオストに関する最初の言及の際にすでに次のように付け加えられている。「彼はスヴァローグとも（呼ばれている——別の写本ではズヴァローグ）」。また数語あとには「（罪を犯した女に）死刑を言い渡した」とあり，『年代記』は次のような全くどこからともつかない一節を挿入している。「彼がスヴァローグと呼ばれたのはこういうわけだ。以前女たちは獣のように暮らしていた（誰でも好きな者に子供を産んでやった）のだが，フェオストが，一人の夫は一人の妻を持ち，女は一人の男のもとへ『посагати〔嫁ぐ〕』よう定めて，罪を犯したものを燃えさかる竈へ投げ込むことにしたのである。それで彼はスヴァローグと呼ばれ，エジプト人たちに崇拝された」。さらにマララと同じく『イパーチイ年代記』も何か別のテキストにたぶん依拠しているようである。『ヴラジーミルの洗礼に関する講話』[3]の第二稿に

---

[1] ルーシのマララースとは，ルーシの神々に関する注釈のついた，教会ロシア語の翻訳を指す（前記〔第 2 章，『SLAVISTIKA』XIV，112 頁〕を参照）。『イパーチイ年代記』は『過ぎし歳月の物語』〔『原初年代記〕〕の最も重要な写本の一つで，このマララの年代記の断片を含んでいる。『スラヴ古代辞典』の「ヤン・マララース」„Jan Malalas”および「ビザンツ年代記」„Kroniki bizantyńskie”の項目を参照。

[2] 引用文中で筆者が断りなく削除している部分を多重点（…）で示した。

[3] 『〔コルスニを攻略した〕ヴラジーミルが洗礼をうけたこと〔について〕の講話』*Слово〔о том,〕како крестися Владимир〔, возмя Корсунь〕*。マンシッカ『史料集』59 頁を参照。

(第一稿のペルーン *Перунъ* の代わりに) 書かれている *Се рука* という部分はスヴァローグ *Сварогъ* とも読みとれるのだが，そのことは，スヴァロージチとも結びつくシフエントヴィトという名前の一つの古期ノルド語化した変種同様，採用しないことにしよう。

いつどこで，このルーシにおける注釈はなされたのであろうか？　クレクはこれらの注釈をマララの最初の翻訳者であった 10 世紀のブルガリア人が行なったとしているが，これは，われわれが前に説明したように[1†]，すべてのタイプのブルガリア文学と矛盾する。ブルガリア文学はギリシア正教会的排他性の中に閉じこもり，トルコやスラヴの異教を火よりもひどく恐れていたのである。これらの注釈は 11 世紀の間にルーシの手によってなされた[2]。それらは鍛冶屋のスヴァローグやスヴァローグの息子である太陽について語っており，スヴァロージチについて言及するのはもっと後代の史料である。たとえば『キリストを愛する者の講話』[3]では，「彼らは火をスヴァロージチと呼んでそれに祈りを捧げている」。また，「彼らはオヴィーン〔乾燥場〕の下で火に祈りを捧げている」。『金口ヨアンネスの講話』では「また，ほかの者たちはスヴァロージチやアルテミドを信じて，それらに馬鹿者どもは祈りを捧げ，雄鶏をつぶす。おお，哀れな雛鳥たちよ，それらは（聖なる者のためでもなく，信心深い者のためでもなく）偶像のために切り殺され，しかも *блутивше*（不敬な言葉を吐いて，セルビア語の *блютити*〔でたらめをしゃべる〕，ポーランド語の *wybluknąć=wyzionąć*〔悪臭などを撒き散らす〕に当たり，チホツキ[4]ではアーリア人に対して用いられている）自分たちで食べてしまう者もいれば，それらを水の中に沈めてしまう者もいる（...）。また火や（したがって，ここではスヴァロージチは火と区別されている）石や，川や，泉や，ベレギニャや，丸太に対して祈りを捧げる者もいて，これは以前の異教時代のみならず，今日もそうなのだ」。

これらの史料に対しわれわれは，ルーシがスヴァロージチをレダル族から借用したなどという疑問については，その可能性すら検討しようとは思わない。この有害な着想にはいささかも可能性なり蓋然性があるとは思えず，こうした大げさな懐疑主義を

[1†] 第 2 章（『SLAVISTIKA』XIV，128 頁）を参照。

[2] 別の権威者によれば，注釈は 13 世紀のものとされる。

[3] 『キリストを愛する〔某者の〕講話』，『聖グレゴリオスの講話』〔本文中に明示なし〕，『聖〔金口〕ヨアンネスの講話』を指す。マンシッカ『資料集』の，特に 174–175 頁を参照。

[4] チホツキとはおそらくアーリア人を非難した数点の著作の作者ミコワイ・チホツキ Mikołaj Cichocki（1598–1669）のことを指す。

もはや尊重するつもりはないからである。しかしながら，スヴァローグの子＝スヴァロージチを太陽と呼ぶ年代記の伝承と，火をスヴァロージッチと呼ぶ二つの『講話』（第三の講話はスヴァロージチと火をはっきり区別している）の伝承の違いは何に由来するのか？　だがこうした違いはおそらく全く根本的なものではないであろう。なぜなら，講話はルーシではあらゆる火をスヴァロージッチと呼ぶなどと虚言を弄しているわけではなく，おそらく，太陽にできなかったことの補いをする，つまり，運び込まれた穀物を乾かす，オヴィーン〔乾燥場〕の火のことを言っているからである。他方，たとえば，家の竈の火もスヴァロージチと呼び習わしていたなどとは講話は言っておらず，太陽＝スヴァロージチは，火で穀物を乾燥させる際の手助けに，すなわち，火事から身を守ってくれるように，呼び出された。矛盾はこのように考えることで回避できるかもしれない。つまり，オーデル川沿岸のスラヴ人にとっては，最高神としてのスヴァロージチが宰領するものは火ではなく，おそらく太陽と天空であった。穀物倉のオヴィーン[1]では，異教的，すなわち，迷信的祭儀がそっくりそのまま残りやすかったのである。

スヴァローグ *Сварогъ* の語源は一体何か？　オーデル川沿岸のスヴァロージチ *Сварожичь* はまさに細心の注意を払って考慮されるべきものであるのに，ヤーギチはこれを一顧だにせず，もっぱらルーシの年代記の伝承からこの名前が捏造であるかのごとく解釈しようとした。そこで彼はそれが *зварение*（夫婦の）「接合」に由来するとして，スヴァローグが *зварщикъ*[2†]であるかのように説明したが，それに対しクレクは，それがルーシのスヴァローグとしても，ましてやオーデル川沿岸のスヴァローグとしても信じがたいとして，正当な反対論を表明した。ヤーギチの『論集』（1908年）にコルシュ[3]は論文「教会スラヴ語 *иногъ=γρύψ*[4†]，*чрътогъ*〔住居〕と *Сварогъ* の外国語起源」（254–261頁）を掲載し，ノヴゴロドの *сварба* を引き合いに出すヤーギチの説を，それが *свадьба*〔婚礼〕の方言の，後代の変種である[5†]として退け，ま

---

[1] オヴィーン〔овинъ〕は，湿った穀物を乾かすための穀物倉の一種の暖房設備。

[2†] おそらく，それぞれ *сварение*「溶接，鍛造」，*сварщикъ*「溶接工，鍛冶屋」の異表記。

[3] Е·コルシュ E. Корш「教会スラヴ語 иногъ=γρύψ, чрътогъ と Сварогъ の外国語起源」*Иноязычное происхождение церк.-слав. иногъ=γρύψ, чрътогъ и Сварогъ*，『V・ヤーギチ記念論集』*Сборник в честь В. Ягича* 所収（ペテルブルグ，1908），254–261頁。

[4†] ギリシア神話でライオンの胴体，鷲の頭と翼を持つ怪物グリュプス。

[5†] 厳密には，ノヴゴロドでは *свадьба* を *сварьба* と発音するという意味である。V・I・ダーリ В. И. Даль『現用大ロシア語詳解辞典』*Толковый словарь живого великорусского языка*，第4版，第4巻の«свадьба»の項目（49欄）を参照。

たこの名前を女たちの *сварение*[1†]，すなわち罵倒（！）に不自然にも由来させようとするマレチチ[2]の考えをも退け，ブスラーエフ[3]が唱え，のちに，クレクも従った意見に戻り，それはサンスクリット語の *svargás*「空」だとしているが，これはスヴァローグをウーラノス＝ヴァルナ[4†]と即物的に同一視するよりもはるかに悪い説明である。クレクによれば（378–382 頁），「スラヴ人は，（家族共同体（ザードルガ）の中の人々が『族長（スターロスタ）』に従うように）他の神々がかしずく神々の神（デウス・デオールム）として，天空と大地，光と嵐の造り主たるスヴァローグ *Сварогъ* を崇拝していたが，この名前は語根 *svar-*，*sur-*にさかのぼることができる。サンスクリット語の *svàr* は太陽，その輝き，晴れた空を意味する。チェコ語の *zvor=zodiacus*〔黄道帯〕と比較されたい（ただし，*zuor=zodiacus* は『言葉の母（マーテル・ウエルボールム）』の中でハンカが捏造したものにすぎず[5]，他方，チェコ語の *svor* はポーランド語の *swór* や *swora*〔ともに犬を引くための革ひも〕，つまり *sъ+ver* なのであり，スヴァローグとも，サンスクリット語の *svàr* とも全く何の共通点を持たず，『Schliesse〔留め金〕，Fuge〔継ぎ目〕』を意味するにすぎない）。接尾辞 *ga-*によって *svargá*『空』（神々と霊魂の居所）という語ができ，これはルーシの *Свар-о-гъ* に完全に対応する。それ故スヴァローグとはペルーンが支配する天空なのだ。スヴァローグがこのペルーンの単なる別名，別称めいたものに見えるのは，最高神が，特に雷の支配者として，ペルーンと呼ばれるからである。スヴァローグ *Сварогъ* を *свар+огъ* と解釈し，*иногъ*，*чръногъ*，*острогъ*〔矢来〕と比較する者もいる。さらに接尾辞は *ъ* だけだと考える者もいて，そうした者たちによれば *сварог-*は *сварг-*の（ありうべからざる）充音だということになる。それ故フォルトゥナートフ[6]は『ベッツェンベルガー論集』第 III 巻で，ギリシア語の *σελαγέω*〔照らす〕を *σελγ-*と，*спиргъ*〔不詳〕を *пирогъ*〔パイ，ポー

[1†] ここでの *сварение* は前出の語（*зварение=сварение*）の同音異義語。

[2] T・マレチチ T. Maletić「バルト海沿岸スラヴ人の神の名前について」*Zu den Götternamen der baltischen Slaven*，『スラヴ文献学論叢』第 10 巻，1887，133 頁。

[3] F・I・ブスラーエフ Федор Иванович Буслаев〔1818–1897，ロシアの文献学者〕『キリスト教のスラヴ語への影響について』*О влиянии христианства на славянский язык*（モスクワ，1848）は，スヴァローグをサンスクリット語の svarga-s「空」に結びつけている。

[4†] ウーラノスはギリシア神話で「天」，ヴァルナはヒンドゥー教で「天の神」を意味する。

[5] 『言葉の母』*Mater verborum* は別名，『一般辞典』*Dictionarium universale*（10 世紀）。13 世紀にこの辞書を筆写したチェコの僧は多くのチェコ語の単語を書き加えたが，ハンカもさらにまた（19 世紀に）とりわけ神話的な性格をもつ 800 以上の単語を書き入れた。

[6] F・フォルトゥーノフ Ф. Фортунатов「リトアニア学」*Lituanica*，『インド・ゲルマン語学論集』„Beiträge zur Kunde der indogerm. Sprachen"，A・ベッツェンベルガーA. Bezzenberger 編，第 3 巻，1879，53–73 頁。脚注は 69 頁。

ランド語 *piróg* も同義〕と，*тварогъ* — Quark〔凝乳〕〔を *тваргъ* と〕比較した」。しかしながら，脚注でクレク自身も認めているように，*svarga* と *Svarogъ* の母音は全く一致せず（子音も一致していないが，それは *svar-* がヨーロッパ諸語ではつねに *l* をともなって現われるからで，*słońce*〔太陽〕はその例に属す），したがって，この比較はすこぶる疑わしく，それが尊重できるのは，その語が前スラヴ時代にまでさかのぼり（それが何の足しになるのか！），また借用関係がない場合のことにすぎないのである。

コルシュによれば，スヴァローグはルーシの小賢しい年代記作者の思いつきではなく，本来，サンスクリット語の *Svargás* と同起源のスラヴの神であった。とはいえ，この名前は正規の語形 *svorog* または *svrag* で現れない以上，借用語とみなすほかはなく，それも，イラン人からの直接の借用ではなく，アーリア人種の別のある種族，つまり，おそらくフィン人にイラン語の *h* の代わりに *s* を伴う語を伝えた種族からのものだというのである。しかしコルシュはスラヴ人から神々や家畜などの名前を取り上げては，それをすべてイラン人だとか，リトアニア人だとか等々に捧げるのを常としているから，その誤謬は示す必要もないが，彼は鳥の *иногъ*（たぶん *ин-*「一つの」からの語形成なのであろう。*инокъ*=「修道士」と比較されたい。またチェコ語 *noh* は語頭の *i* を欠いている）に対してまでもグリュプスのアラビア語の名称 *anqā* を語源として捏造し，ほとんど唯一ウクライナ語の *мурог*「草地」のみを接尾辞-*г* を伴う本来の産物と認めている。しかしこれもまたお伽噺である。要素 *g* ないし *ż* を伴う接尾辞（*sługa*〔召使い，ロシア語 *слуга* も同義〕，*struga*〔小川〕等のような本来的語形成は除く[1†]），およびさまざまな先行母音を伴う接尾辞，*-eg*，はるかにしばしば*-eż*，*kradzież*〔「盗み」，ロシア語方言 *крадёжь* も同義〕，*lubież*〔悦楽，満足〕，*cierpież*〔ロシア語俗語 *терпёж* は「我慢」〕，*trzymież*〔意味不詳〕，*-og*，*-ąg*，*-ięg*=リトアニア語*-ingas*，*-yga*，*łodyga*〔「幹，茎」，ロシア語方言 *лодыга* は「骨，さいころ，くるぶし」〕，*kryga*〔「流氷のかけら」，ロシア語方言 *крыга* も同義〕，*-ug*，*pleciuga*〔おしゃべり好き〕，*wijuga*〔ロシア語 *вьюга* は「吹雪」〕，*-ig*，*кънигы*[2†]〔文字〕，*верига*〔枷〕等は，名詞類や動詞の語幹から，語幹の意味で活動する人間または当該の性質を付与された物を意味する名詞を

[1†] 接尾辞ではなく語根の中に *g* ないし *г* が含まれることを言っている。

[2†] ブリュクネルはその『ポーランド語語源辞典』*Słownik etymologiczny języka polskiego*, Warszawa: WP, 1974（初版はクラクフ，1927）の„księga”（「本」）の項目で，この語がポーランド語方言 *kien*（幹，丸太）から形成されたと説明している。しかし現在ではこの語の語源に関する明確な定説はないとされている。たとえば，ソ連科学アカデミー・ロシア語研究所編『スラヴ諸語語源辞典』第 13 分冊 *Этимологический словарь славянских языков*, вып. 13, М.: Наука, 1987 の «*kъniga»の項目を参照。

形成するのであって，たとえば，*ostróg*[1†]（つまり *ostrokół*〔矢来〕），*ostroga*〔拍車〕と *ostręga*〔とげ〕，*mitr-ęga*[2†]〔杜撰な仕事，怠け者〕，*pstrąg*[3†]〔虹鱒〕，*barłóg*〔動物のねぐら〕（3 つすべての文法性の語形で現れ，中世ロシア語では *берлога*，古ポーランド語では *barłogo* となるが，やはり 3 性で現れる *dyszel*〔轅〕，*dyszla*〔古ポーランド語形〕，中世ロシア語 *дышло*！と比較せよ）は *barło* から[4†]，*пирогъ* は *пиръ*「祝宴」から，*иногъ*「グリュプス」=「群棲しない老いた野獣」[5†]は *инъ*=「一つ」から，*batog*〔「大きな鞭」，ロシア語方言 *батог* は「棒」〕（語源はトルコ語 *budak*「枝」でも，イタリア語 batacchio，batocchio〔棒〕でもない）は *bat*〔「鞭」，ロシア語方言 *бат* は「葉のないしなやかな細枝」〕（これもまた何らかのロマンス語系民族の *battre*〔打つ〕の借用ではない！）から，そして無数の中世ロシア語の *-яга* とポーランド語の *-ięga*，*włóczęga=бродяга*[6†]〔浮浪者〕，*wiciądz=витезь*[7†]〔勇士〕，*ciemięga*[8†]〔おいぼれ〕，*скряга*[1†]

[1†] 以下，いずれも形容詞 *ostry*「尖った」から。なお，中世ロシア語 *острогъ*，*острога* も同義。

[2†] ブリュクネルの『ポーランド語語源辞典』の„mitręga”の項目では，*mitręga* は *mitr-*（=*mit-*）から形成されたとされる。この語根はたとえばポーランド語方言 *mituś*，中世ロシア語 *митусъ*，*митусь*（いずれも副詞「逆に」）等に現れる。『スラヴ諸語語源辞典』第 19 分冊（1993）の «*mitě/*mito»，«*mitusь, *mitusiti (sę), *mitušati (sę)»，«*mitъ»の項目をそれぞれ参照。

[3†] 形容詞 *pstry*「色とりどりの」から。

[4†] ブリュクネルの『ポーランド語語源辞典』の„barłóg”の項目にも，「**barło* ‘mierzwa’〔もみくちゃにされた藁〕から形成された」という説明があるが，現在では明確な定説はまだないとされる。たとえば，前掲『スラヴ諸語語源辞典』第 3 分冊（1976）の«*bьrloga/*bьrlogъ»の項目のほか，バンコフスキ A. Bańkowski『ポーランド語語源辞典』第 1 巻 *Słownik etymologiczny języka polskiego*, t. 1, Warszawa: PWN, 2000 の„barłóg”の項目を参照。

[5†] ギリシア語 *μονιός* の翻訳借用語としての原義を指す。ファスマーM. Vasmer（M. Фасмер）『ロシア語語源辞典』（ロシア語版）第 2 巻 *Этимологический словарь русского языка*, т. 2, Москва: Прогресс, 1967 の«иног»の項目のほか，『スラヴ諸語語源辞典』第 8 分冊（1981）の«*jьnogъ»，«*jьnokъ(jь)»の項目も参照。

[6†] 動詞 *włóczyć się=бродить*「ぶらつく」から。

[7†] ブリュクネルの『ポーランド語語源辞典』の„zwyciężyć”（「勝つ」）の項目では，スラヴ祖語名詞 **vitь*「戦利品」から形成されたとされている。また，チェルヌィーフ П. Я. Черных も「その説明が真実に最も近いとみなしうる」と述べている。彼の『現代ロシア語歴史語源辞典』第 1 巻 *Историко-этимологический словарь современного русского языка*, т. 1, Москва: Русский язык, 1993 の«витязь»（*витезь* に同じ）の項目を参照。

[8†] ブリュクネルの『ポーランド語語源辞典』の„ciemię”（「頭頂部」）の項目では，名詞 *ciemię* から形成されたとされている。スワフスキ F. Sławski も同様の見解を述べている。彼の『ポーランド語語源辞典』第 1 分冊 *Słownik etymologiczny języka polskiego*, zesz. 1, Kraków: Towarzystwo miłośników języka polskiego, 1983 の„ciemiężyć”（「抑圧する」）の項目を参照。しかし，バンコフスキは先史時代に遡ると考えられる失われた仮説的動詞 **tьmati*, **temeti*（または **tęti*, **tьmeti*）「衰弱する」から形成されたとして，前述の見解を否定している。彼の『ポーランド語語源辞典』の„ciemięga”の項目を参照。

〔守銭奴〕，*łodyga*[2†]，*кръкыга*[3†]〔荷馬車〕，また，私には起源の分からない *рычагъ*[4†]〔梃子に用いる長く太い棒〕，*сапогъ*[5†]〔ブーツ〕，*forma*〔形〕からの *formaticum=fromage*〔チーズ〕に似た *twarz*〔「顔」，原義は「被造物，形」〕からの *twaróg*〔凝乳〕，*чрьтъ*「テント」からの *чрьтогъ*[6*]「住居」等々がある。同様に，結局，*сваръ*〔口論〕から火と口論する鍛冶屋を，スヴァローグ *Сварогъ* と名付けたのであろうか？　もちろん，地上の，普通の鍛冶屋ではなく（すでに普通の鍛冶屋は，非常に古い，リトアニアとスラヴが一体化していた時代に遡る名称の *вътръ* と *кърчии* を持っていたが，二つ目の名前は *кърчагъ*「壺」や *кърчома*「旅籠」の中に反映され，先の二つの名称は後に，平凡な新しく形成された *коваль*，*ковачь*，*коварь*，*кузнецъ* などに取って代わられた），天空の鍛冶屋，ヘーパイストスのことだ。なぜなら，天空の住人は異常で，非日常的な名前を持つものだからである。そしてここにこそ，最も興味深く，最も重要なスラヴ神話が存在するのだが，それどころか，以下でリトアニア・スラヴ神話を見て気が

[1†] 動詞 *скрыть*「隠す」から。

[2†] ブリュクネルの『ポーランド語語源辞典』の„łodyga"の項目では，名詞 *łódź*「小船」からの可能性を示唆するのみ。

[3†] 古教会スラヴ語。スラヴ祖語動詞 **kъrkati*「があがあと鳴く」から。

[4†] ファスマーの『ロシア語語源辞典』第 3 巻（1971）の«рычаг»の項目では，ポーランド語方言 *ryczą̨g*「荷馬車の前輪の車軸にそって取り付けられた可動の柄」からとされる。しかしチェルヌィーフはそれに懐疑的である。彼の『現代ロシア語歴史語源辞典』第 2 巻の«рычаг»の項目を参照。いずれにせよ，この両者の考えでは-*аг* は語根に含まれることになる。

[5†] 現在もこの語の語源については問題があるが，借用語ではなく，語根 *сап-*と接尾辞-*ог-(ъ)*による語形成ではあると考えられている。チェルヌィーフの『現代ロシア語歴史語源辞典』第 2 巻の«сапог»の項目を参照。

[6*] ベルネカーは *чрьтогъ* を，その元来は正しかった意見を変えてしまったミクロシチに倣って，トルコ・ペルシア語の *čartāk*（字義通りには，「4 つのバルコニー」）に由来すると説明しているが，しかし実際は *čardak*〔不詳〕を東スラヴ人たちは *čerdak*〔不詳〕，*čardak* として受け入れたのであって，*čartāk* は，コルシュが推測しているように，辞書編纂者の捏造にすぎないのかもしれない。当然，*чрьтогъ* は彼にも「アラン語」〔アラン人は南ロシア草原地帯に居住したイラン系騎馬遊牧民族〕とやらの *Kartaka*〔不詳〕からの借用語のように見えたのだが，この言葉はフィン語の *karta-*〔不詳〕から生まれたもので，この言葉の方もまたアーリア語の *gordo-*，*garda-*〔不詳〕からフィン語化（！）したのである。付言すれば，*g*，*ż* のほか，稀にではあるが，純粋に音声的変種の二重子音 *zg* も現れることがあり，たとえば，*młod-*〔młody「若い」の語幹〕から *młodzież*〔若者〕ができるように，*дреб-*（дробный〔細分された〕，drobny〔細かな〕）から形成される *дребезги*〔粉々〕（*drobiazg*〔些事〕）や，*мелюзга*「小さな生物」の例がある。他の例としては，*лачуга*〔ぼろ小屋〕，*белуга*〔ベルーガ（チョウザメ）〕，*хапуга*〔かっぱらい〕，*пичуга*〔小鳥〕，*пьянчуга*〔飲んだくれ〕，*булыга*〔丸石〕，*забулдыга*〔放蕩者〕，*бедняга*〔哀れな人〕，*портняга*〔下手な仕立屋〕，*коряга*〔水没した木の幹〕（*кор-н* の語形の段階はない！），*коврига*〔大型の丸パン〕，そして *шемлига*（*żemła*）〔ロールパン〕等々がある。

つくように，このことはこれまで事実の研究の代わりに無意味な空想にかまけてきた神話学者たちの注意を惹きはしなかった。というのも，スヴァローグがヘーパイストスだということを，ルーシの注釈者はおそらくヘーリオスのギリシア系統学から思いついたのではなく，それはおそらく周知の事実だったからである。スラヴ神話は天空の鍛冶屋に太陽と火（だが家の竈の火ではない！）を組み合わせた。火については理解は容易だ。なぜ太陽もなのかについては後述する。この組み合わせを表していたのが，太陽と火の神に与えられた呼び名，スヴァロージチ，スヴァローグの息子なのである[1]。

スヴァロージチをスラヴ神話全体の構造が拠って立つ礎石と定めた今，われわれはこう問うことにしよう。オーデル川とドニエプル川流域以外に，その明瞭な痕跡が，せめて地名の中にでも，見出されないのであろうか？

わが国ではこれまで地名に対する注意が神話研究のためにはあまりにもわずかしか払われず，もっぱらペルーンばかりが追求され，より重要なものが等閑に付されてき

---

[1] スヴァローグ *Svarogъ* という名前の語源は以前未解決であるが，イラン語語源説の支持者が増えている。スラヴ語固有の語根 *svar-* からの出自の可能性を，K・モシンスキ Kazimierz Moszyński〔1887–1959，ポーランドの民族学者〕もまた『スラヴ人の民衆文化』第 2 巻，第 1 分冊 *Kultura ludowa Słowian*, t. II, zesz. 1（クラクフ，1934）の 503–506 頁で許容している。彼は〔中世ロシア語〕動詞 *svariti sę* には「怒る」の意味があると，ベラルーシ語の言い回し *Бог сварицьца*「神が怒る」（落雷に関連して）を根拠にして，認めているのである。しかし彼もイラン語語源説の方に優先権を与えていた。ブリュクネルはモシンスキの著作の書評を『歴史季報』LII（1938）210–225 頁に発表し，次のように述べている。「[スヴァローグは] かつて最高神，雷神であった。スラヴ人は他の神［つまり，雷を司る他の神］を知らなかったのである。わが国の神話学者たちは，あたかもスラヴの最高神がペルーンと呼ばれていたかのような話をでっち上げた。しかしペルーン〔雷〕という言葉が存在したのは話し言葉の中なのであって，神話学の中ではない。キエフにおいてはようやくノルマン語トール *Thor* がダージボグの前に登場したが，古くからあったスヴァロージチの方は一地方の火の神に降格され，たとえば穀物を火で乾かす際などに呼び出されていたのである。同じ頃，つまり，1000 年前後，スヴァロージチはエルベ川流域のスラヴ人の間の最高神だったが，そのことはティートマルがはっきり証言した通りで，彼はラドゴシチでのスヴァロージチ崇拝について語ったのであって，モシンスキがドイツ人に倣って受け売りしているレトラでのことではない（…）。スヴァローグ *Svarogъ* という名前の中の *-ogъ* というスラヴ語固有の接尾辞は，この言葉がスラヴ語固有の，つまり，理解可能な名前を表していることを立証している（…）」。続いて彼は同様の構成を持つ単語，*raróg*〔ワキスジハヤブサ〕，*piróg*，*ostróg*，*batóg*，*barłóg*，*иногъ*，*twaróg*，*trwoga*〔恐怖〕，*Стрибогъ*〔ストリボーグ〕を列挙し，その後さらにこう述べている。「それ故，火の神の崇拝用の名前スヴァローグ *Svarogъ* は *svarъ*〔口論〕から形成され，物質的火のためにはその元々の印欧語の名前が残ったのである（…）。火は物と『口論し』，それを天上や地上で，口論やひいひい声やきいきい声の中に呑み込む（…）。スヴァローグ *Svar-ogъ* という名前が *svarъ*（『口論好き』まがい〔モシンスキからの引用〕）から形成されたとする私の説明は，それ故，絶対的に確かで，唯一根拠あるものなのに，それについて著者は『言及するまでもない』（509 頁脚注）と評している」。

た。国外では，神話史料がわが国の乏しさに比してはるかに豊富だということもあるが，以前からこのことは考慮されていたのである。最新のスウェーデン語の著作，マグヌス・オルセン Magnus Olsen『ノルド語の地名における異教崇拝の名残り』*Hedenske kultminder i nordiske stedsnavne*，第1巻（今のところ1巻のみ），クリスチャニア〔オスロの旧称〕，1915を参照のこと。この著作はO・リグ O. Rygh の膨大な地名集『ノルウェーの地名』*Norske gaardnavn* に基づき，ウップランド〔ウプサラの旧称〕における諸神崇拝について述べている。オルセンが立証したのは，自然の中での諸神崇拝（*-vangr*，*-akkr*，*-vin* との合成地名による）の方が，神殿での崇拝（*-hof* との合成語）より古いということである。彼は文献による伝承では全く知られていない奇妙な神 *Ullr* または *Ullin*（富，平和，勝利の主神）をすら掘り起こした。その傍らには女神たち *Disir* が現れる。後にようやく年下の *Thorr* がこの年長の神を追い払うこととなる。オルセンの説明すべてが批判に耐えうるか否かは大した問題ではない（1917年1月27日付けの『文学中央新聞』„*Literarisches Zentralblatt*"を参照のこと）。われわれは事実そのものに注意を払うことにしよう。それが，古く，また神話学にとって信頼のおける他の文献を欠くわれわれにとって，とりわけ重要なのである。

神話的地名のうち最も興味深いのは，古くから引用され，今日も存在しているスファロジン *Swarożyn*（スヴァローグの女性形スヴァローガ *Swaroga* からの形成）で，スタロガルト〔スタロガルト・グダンスキ〕とチチェフ〔いずれもグダンスクの南方の都市〕の間に位置する。1205年，「スヴァロジンと呼ばれた荘園のスヴァダイアヴィツ（スファダイエヴィツ）と呼ばれる」[1†]ヤンとヘンルィクは，水車小屋に面したいくばくかの敷地をオリヴァ〔グダンスク北西部〕修道院に売却し，13世紀にはこの語形のほかに別形スファリシエヴォ *Swariszewo* が現れるが，残存せず，*Swarożyn(o)*〔スファロジンまたはスファロジノ〕が勝利を収めた[2]（St・クヨト神父 Ks. St. Kujot『プロイセン王国史』*Dzieje Prus Królewskich*，1913，I，211頁）。これらの語形の交替から判断して，われわれはその中にスファジコヴォ *Swarzykowo*〔不詳〕も，スファルィシエフ *Swaryszew*〔不詳〕も，スファジエンツ *Swarzędz*[3*]〔ポズナンの東方の都市，同名の湖

[1†] 原文（中世ラテン語）は dicti *Swadaiawiz (Swadajewicy)* de villa, que *Swarozina* dictur。

[2] ブリュクネルの引用した名称が証明するのは，ポーランドでは *swarzyc się*〔口論する〕という言葉が知られていたということでしかなく，それは元々自明であるが，*Swarożyn* という地名だけは *Swaróg*，*Swaroga*，*Swaroż* という名称の現実性をどうにか証明しうるのかもしれない。

[3*] この地名を私はその接尾辞に欺かれて間違って説明したことがある。*Skwarędъ* とやらのように思ったのであるが，しかし *Skw-*はかなり根強く残存している（スクフィエルニエヴィツエ *Skwierniewice*，後のスキエルニエヴィツエ *Skierniewice*〔ワルシャワの西南の都市〕，スクフィ

は *Jezioro Swarzędzkie* ともいう〕も，さらにはスファロチン *Swaroczin*〔不詳〕も加えてかまわないであろう（『ポーランド法古文献』*Starodawne prawa polskiego pomniki*, VIII, 1888，第 10609 号）。なお，ミクロシチは *Сварогъ* と *сваръ* の二つの語を切り離し，*Сварогъ* を語根 *sur* に関連づけ，*kus*〔泡立つ物〕から *квасъ*〔クワス〕に変わったと同様の母音偏差を伴ったのだとしているが，しかしスラヴ人はそもそも神々の名称同様，人間の固有名詞を理解可能な語からのみ導き出したのであって，「語根」からということはあり得ない。

太陽あるいは火に対するスヴァロージチという名称は，もちろん本来的なものではなく，ただの呼び名にすぎなかったのが，しかしまさにこの新しい呼び名が，時とともに，本来の主たる名称を押しのけてしまうことは，何度も（むしろおそらく絶えず）起こることであって，その例をわれわれはトシグウフ *Trzygłów*〔トリグラフ *триглавъ*，三頭神〕に見ることができる。神が元々トシグウフと呼ばれていたなどということはありえず，それはもちろんダージボグ *Дажьбогъ* そのもののことなのであって，この神は（異教の神官 *жерци* の間違った説明によれば）地上，天空，地下のすべてを見ていて，目には金色を帯びた目隠しを当て，人間の罪を見逃し（！），その像の故にトシグウフと呼ばれていた。この同じダーチボグがアルコナではシフィエントヴィト *Swiętowit* と呼ばれていて，収穫の分与者とされ，この神を祝し毎年の収穫後，同時期に祝われるベラルーシのボハチ *богач* のように，最も重要な祝祭が執り行われたのである。

シチェチンのトシグウフやアルコナの四頭のシフィエントヴィトを別のやり方で説明しようとする試みはすべては無駄である。シフェントヴィトは風神であるとか，予言の神であるとか，その他何の神でもよいが，そうした奇妙なスラヴの神であったこ

エジナ *Skwierzyna*〔ポズナン西方の都市〕と比較せよ）。コジェロフスキによれば，『ポズナン地誌』II（279 頁）が伝える 15 世紀のこの湖と都市の名前は，1408 年に *Swarzadz*，1419 年に *Swarocz*，16 世紀には *Swarzoncz*，14 世紀では，1366 年に *Swanrancz*，1377 年と 1397 年に *Swanrzancz* で，1398 年の *Swarzotsky* は疑わしい。コジェロフスキ神父は「名称は不明瞭。土地固有かの問題あり。最初の音節 *swan-*と紋章の名称 *Swangroda*〔不詳〕を比較のこと」と付け加えている。私なら *swan-*の表記には大した意味は認めない。実際，何度も繰り返し現れるからには筆記者の普通の誤りではないであろう。あるいは後続の鼻母音 *ą* の影響で，鼻母音が最初の音節にも現れたのか？　接尾辞は*-ięd* で，これは*-ęd* 同様マズルィ地方の地名の中に何度も繰り返し現れる。パヴィンスキ Adolf Pawiński〔1840–1896，歴史家，公文書研究者〕の文献学論集〔彼が創刊に加わった『史料集』*Źródła dziejowe*（1895–）のことか？〕VIII に繰り返し現れるメモにより，*Molęda*（クラクフにもある），*Łabęda*（だがこれは *łabędź*〔白鳥〕に由来し，〔この地名の形容詞形は *Łabędzki* ではなく〕*Łabęcki* である），*Mrzegenda*（？）と比較せよ。

とは決してないのだ。同様にヤンコの次の発言（220頁）も間違いである。「『力勁き勝利者』シフィエントヴィトを筆頭に戴くバルト海沿岸の神々の形象は，些細な例外はあるものの，完全に『ポラブ人的』であり，栄誉ある戦士や部族の勝利者の記憶から，要するに，氏族的，種族的祖先崇拝から発達しただけにすぎないのであるから，この神々を本来の天空の中に置くことはできない。」ニーデルレもこのような種族的祖先崇拝の拡大説には反対したが，それはきわめてもっともなことだ。シフィエントヴィトがルギヤのオリュンポス全体を支配していたという事実そのものが，この拡大説の根拠を覆しているのであって，そうした支配は，その名前そのものからしていかなる種族的系譜からも排除されるレダル族のスヴァロージチ[1*]においても，あるいはまた，神格化された祖先とみなすことの不可能なトシグウフにおいても，繰り返し見られるのである。ハーフェル川〔エルベ川の最長の支流〕沿岸とポモジェ（ヴォルガスト）のスラヴ人のスヴァロージチ，シフィエントヴィト，トシグウフ，ヤロヴィトは，なんと同じ一つの神格の四つの異なる名前なのであった。絶えず共通のものを捨てては，独自のもの，より風変わりなものを先を争って追い求めようとするスラヴ的個人主義が，祭式においても勝利を収めたのである[2]。畦一つ隔てて隣接する諸部族が，それぞれ全く異なる，まるで完全に別に見える神をオリュンポスの筆頭に立てていたことを，ほかにどう解釈すべきなのか？　名前こそ様々でも，それは同じ一つの神だったのであり，また同じ属性，意味，威光を備えていた。取るに足らない些事や，「トシグウフ（三頭）のスヴァロージチ」，「ダージボーグ，スヴァロージチ（スヴァロー

[1*] レダル族の祭式の細目はすべて完全に一致しており，たとえば，サクソンの伝承やバンベルグのオットーOtto z Bambergu〔1060または1062–1139，バンベルグの司教〕の聖者伝作者の伝承によって，ティートマルの伝承を修正することさえできるほどである。ティートマルによれば，レダル族の神殿の壁には精巧に彫られた神々の像があったことになっているが，しかし彼はそれを自らの目で見たわけではない。デンマーク人たち〔主にサクソンを指す〕とバンベルグのオットーがより正確に確認したように，壁には非常に正確に彫られ，厚く彩色された，様々な物が認められたのであって，ティートマルという報告者はそこから神々を大量に作り出したのである。スタニツア *stanica*〔戦時に掲げられた，柄の先に据えられた神像，紋章，旗等〕，すなわち，シフィエントヴィトの巨大な旗は，敵に恐怖をもたらし，味方に勝利の確信を与えるヤロヴィト *Jarowit* の盾と同じ意味を持っていた。シフィエントヴィトやトシグウフ等の騎馬に関する細目〔シフィエントヴィトの神殿の白馬が夜明けになると泥で汚れていたので，夜間にこの神が敵と戦ったと信じられた〕の一致は，それらが異なる名称を持つ同一の神格であったことを証明している。

[2] 名称の変わりやすさはスラヴ的個人主義とは何の関係もない。仮にそもそも様々な地方的名称の背後に一つの神が隠されているというブリュクネルの見解が正しいとしても，「隠している」名称の発生は，個々の種族の中の，そして，その種族が別の宗教的文化水準に独自に移行する際の，生活の帰結とみなすべきである。

グの子)」ほかの呼び名から，見かけは新しい別の神が生まれ育ったのである。

ルーシのダージボグ＝スヴァロージチとレダル族のスヴァロージチの一致は，したがって，スラヴ神話全体から伝えられた事実の中で，最も重要で最も興味深いものであることに変わりはない。その一致によって，その先の説明が可能になるからだ。したがって，異なるスラヴ人たちの信仰は，言語や生活様式と同様に，つまり，非常に正確に，一致し，最小限の状況証拠があることがはっきりすれば，われわれがある部族から別の部族に神を移しかえることには何の支障もない[1]。したがって，われわれは大胆に，ダージボグ＝スヴァロージチ，つまり，太陽を，異教の真ん真ん中に，あるいは筆頭に据えることにしよう。一方の名称は，ポーランドではダチブク *Dać bóg* という名称で繰り返し現われる（17 世紀にもまだ，たとえば，チャルンクフ〔ポズナンの北西の都市〕の住民の間で，知られていた）が，ここにはあるいはセルビアの民間説話，といっても明らかにマニ教，つまり，ボゴミール的二元論色彩が濃い説話のダボグ *Дабог*（キリスト教の神に対立するものとしての，悪しき霊）の意味合いさえあるのかもしれない。もう一つの名称スヴァロージチはルーシでもレダル族のもとでも繰り返し現われる。したがって，太陽＝ダージボグはスラヴの主神格なのであり，自然そのものからはすでに切り離されていて，自然の単純な擬人化ではない。その存在はスラヴ人が宗教的発展の階梯をさらに高く上り，大地や水や火や雷（ペルーン！）や太陽や月そのものを崇拝していたのではないことを証明しているのである。ヤンコは，借用語 *luna*〔月〕を「月」＝「太陽の妻」の神話的名称とみなそうとしたが，しかしスラヴ人は月 *miesiąc-księżyc* をいかなる女性的存在とも認めはしなかった。これはリトアニア人も同様で，月の名称は彼らの間でも常にすべて男性である。

ダージボグ *Дажьбогъ* の「中心的な」意味に関して，名前そのものについて一言しておこう。以前の論考でわれわれが推測したことであるが，「ボーグ *богъ*」は，本来，富を意味していたのであって，神の意味ではなく，合成語ダージボグ *Дажьбогъ* から，その第二の部分が神という新しい意味でようやく一般化されたにすぎず，換言すれば，古代ペルシア語 *baga*〔神〕との一致は，双方の語が双方の意味において一致しようとも偶然であり，したがって，イラン=スキタイ語のいかなる影響も，または借用関係も論外なのである[2]。ヤンコもまた借用についての意見を退けているが，ベルネカ

---

[1] ある種の一般的な問題，たとえば，自然崇拝，祖先崇拝，火崇拝に関する限りは，この見解は受け入れられるが，しかし，神々の名称，さらには信仰における神々の位置に関してすら，否である。

[2] A・ブリュクネル「ピャストについて」，*O Piaście*，『科学アカデミー歴史・哲学部門論集』

ー[1]はこの意見をヘーン（私には，彼がこのでたらめをでっちあげた最初の人物のように思われる）に倣ってさらに繰り返してこう述べている。「『神 Gott』におけるスラヴ語とアーリア語の遭遇は，スラヴ人がイランのスキタイ人からこの言葉を借用したことを推測させる[2†]。」しかしながらヤンコ（236 頁）によるこの言葉の説明は違っていて，それは彼にとっては運命と宿命の神を意味する。「神 богъ とは本来『分与』のことで，時とともに，ダージボグ *Дажьбогъ* や *богатыи*〔富んだ〕や *убогии*〔貧しい〕のように，全く物質的な意味での『豊富，恵み』となった。しかしその本来の意味が（…），人格化され，神格化された *богъ* の中にもかつてはたぶん現れていた。つまり，宿命の授与者，贈与者なのであった。一方，ここから，富とすべてのものの贈与者という概念までは，つまり強大な神的存在，特にキリスト教的な神的存在という概念までは，時間的にはかなりの，観念的には些細な一歩なのである。」私の説明の方が首尾一貫している。それに基づけば，богъ は単なる「富」であり，本来，つまりアーリア人の父祖の時代にはまだ単なる「分与」のことだったのであって，同じ意味が合成語ダージボグ *Дажьбогъ* にもあり，この合成語からようやく богъ-deus〔神の意味での богъ〕が発達した――ダージボグそのものがスラヴの神々の筆頭なのである以上，これは何の不思議もないことなのである[3]。短縮のために合成語から捨てられるのは常に第二の部分である（ロシア語 *унтер*〔= унтер-офицер〕= Unteroffizier〔下士官〕，*шпиль*〔= шпильман〕= Spielmann〔吟遊詩人〕，*Питер*〔= Питербург（Петербург）〕= Petersburg〔ペテルブルグ〕，*Шлиссель*〔= Шлиссельбург〕= Schlüsselburg〔シュリッセリブルグ〕，*Ижора*〔= Ингерманландия〕= Ingermanland〔インゲルマンランジヤ（イジョーラ），かつてフィン族が居住していたネヴァ川沿岸の地区の歴史的呼称〕ほかを比較のこと）が，しかしこの場合はそれはあり得ず，第二の部分が独立したのである。

ダージボグ *Дажьбогъ* という名前の唯一正当な根拠を持つこの解釈のほかに，別の全く恣意的な解釈もあって，たとえば，合成語の第一の部分が雨 *дождь* に由来する

„Rozprawy Wydziału Historyczno-Filozoficznego AU" XXXV，1898，307 頁以降。

[1] E・ベルネカー，記念出版『文化・言語史論集。エルンスト・クーン生誕 70 年記念』*Aufsätze zur Kultur und Sprachgeschichte, Ernst Kuhn zum 70. Geburtstage*，ミュンヘン，1916 年，および『スラヴ語語源辞典』*Slavisches etymologisches Wörterbuch*。

[2†] 引用文原文はドイツ語。

[3] したがってブリュクネルはダージボグを「富の贈与者」と解釈しているのであって，ヤンコのように「運命の贈与者」と解釈しているのではない。ダージボグの影響でボーグ *богъ* という言葉が今日的な意味を得たという思いつきは語源学者たちの同意を得てはいない。F・.スワフスキ『ポーランド語語源辞典』，および『スラヴ古代辞典』の「神」„Bóg"の項目を参照。

というマクーシェフ[1]の説がそうである。また，スラヴ語 *deg-*「焼く」（**degǫ*の代わりに *žegǫ*〔「私は焼く」〕）がサンスクリット語 *dah* を起源とするという説明も根強く残っているが，この説は意味の上ではわれわれの寒冷地よりはむしろ暑い地域の太陽にふさわしいであろう。これは古くからあるロシア人研究者たちの説明であって，ニーデルレの指摘[2†]（111 頁）から見る限り，A・ポゴージンとコルシュもこの説明に戻ってしまっている[3]（彼らの論考自体は未見である）。ポゴージンは**дажебогъ* から出発し，この語の最初の部分にドイツ語 *Tag*〔日〕やプロイセン語 *dagas*（夏）を認め，だからスラヴ祖語**dogъ* は日，夏，暑熱を意味したのだとする。しかし，*даже-* よりも *доже-*という形が予想されるということは措くとしても，そのような語の痕跡はスラヴ人の間にはなく，ダージボグの語形はすべて，*дати*〔与える〕の命令形だということを示しており，スラヴ人は自分の神々を自分に理解可能な名前で呼んでいたという一般原則に照らして（他のすべてのアーリア人たちの間でも事情は同じであり，だからこそ，この一般原則そのもの以外には，彼らの間には，神の名前に関して，人名に関してと同様，ほとんど何の一致もないのである），私は躊躇なく，音声とも意味とも一致しないこのような説明を斥けることにする。

ダージボグには『イーゴリ遠征物語』も 2 度言及している。一度は，ルーシでゴリスラーヴァの子（この名は作者の捏造だが，ポーランドに実在した），オレークの代に，内乱の種が播かれて芽を吹き，「ダージボグの裔（すえ）」なる民の財宝（たから）が泯（ほろ）びたことを嘆くところ[4†]，もう一つの箇所は，「はや哀傷の　ときは来た。／はや（ルーシの）武者どもは　（ポーロヴェツの）曠野に沈み／『ダージボグの　裔』なる民の／軍勢の　ただ中に／《よこしま》（обида）が　現れたのだ[5†]」である。両方の箇所の「ダ

---

[1] W・W・マクーシェフ Викентий Васильевич Макушев〔1837–1883，ロシアの歴史学者〕の『文部省雑誌』«Журнал Министерства Народного Просвещения» CXCVI，265 頁以降，および「*Dažьbogъ* という語の起源について」*О происхождении слова Дажьбогъ*，『文献学紀要』«Филологические Записки»，第 17 巻，第 3 号，70–72 頁以降，ヴォロネジ，1878 年。

[2†] 『スラヴ人の古代』を指す。第 1 章（『SLAVISTIKA』XIII，299 頁）を参照。

[3] ニーデルレがあげているのは，I・I・スレズネフスキイ，Ф・ブスラーエフ，O・ミルレル Орест Федорович Миллер〔1833–1889，ロシアの文芸学者，民俗学者〕，A・アファナーシェフ，新しいところでは A・ポゴージン Александр Львович Погодин〔1872–1947，ロシアの歴史学者，文献学者〕，Ф・コルシュである。今日でもまだイラン語語源説の支持者はいるが，しかしブリュクネルの推奨したスラヴ語固有語源説が信奉者の数を増やしている。『スラヴ古代辞典』の「ダージボグ」„Dażbóg”の項目を参照。

[4†] 『イーゴリ遠征物語』第 64 節。

[5†] 同第 75–76 節。訳文は以前と同様木村彰一訳（岩波文庫）によるが，() 内の補足，『』による強調はブリュクネルによる。また固有名詞の表記は文脈にあわせて変更した。

ージボグの裔」はルーシを意味する。「ダージボグの裔とは集合名詞で，チェルニーゴフまたはチェルニーゴフ・ルーシの種族名（ノーメン・ゲーンテイス）のことである（…）。いかなる貴顕，あるいは支配者，あるいは全部族の始祖としてダージボグが想定されていたかは不明だが，ここで述べられているのはオレーグの末裔たちが支配していたルーシの一部であり，作者はダージボグを，それが実際に崇拝されていない地域または部族に関連づけるわけにはいかなかったのである。したがって，『物語』のダージボグについての言及は，ヴラジーミルがダージボグを自分の神々の中に加えたというわれわれの推測を裏付けているのだ。なぜなら，ダージボグはヴラジーミルに従属するスラヴ・ルーシの諸部族の一つの神であったのだから」（アーニチコフ[1†]，338–340 頁）。したがって，アーニチコフは，彼より数年前にヤンコが，そしてまた千年あまり前にギリシア人聖教者たちが（そして彼に倣ってスラヴ人たちもが）陥ったのと同じ誤謬に陥り，またもや浅薄きわまりない神話史実説の過ちを犯したのだ。マララにとって，そして彼に倣ったルーシの年代記作者たちにとって，ヘーパイストス，ヘーリオス等は，愚昧で，悪魔にたぶらかされた臣下が神格化した皇帝なのであった。同様に，ヤンコはオーデル川やルギヤの神々の中に，そしてアーニチコフはルーシのダージボグ，ストリーボグその他の中に，部族の英雄や神格化された祖先を認めたのである。これがひどい間違いだというのは，ルーシの代わりにダージボグの裔なる民について語るということが，『イーゴリ遠征物語』の手法（マニエラ）[2] に適ったことだからである。『物語』は冒頭ではっきりと，その意図が「начати *старыми* словесы трудных повестии о полку Игореве[3]」ことだと強調していたではないか。そうした「過ぎし昔のことば」に属するのがまさに（始まってすぐの）ボヤーンや，ヴラジーミルについての言及[4†]であり，さらには，比喩のすべて（白鳥の群に放たれた鷹，つまり指とグスリの弦[5†]）や虚構（ヤロスラーヴァの子の代わりに，ゴリスラーヴァの子，オレーク），形容辞（ゴートのうまし乙女ら[6†]，トローヤンの地，道，時代[7†]），誇張（たとえば，ドイツとヴェネ

[1†] 『異教と古ルーシ』を指す。第 1 章（『SLAVISTIKA』XIII，303 頁）を参照。

[2] なかんずくまさにその方法が『物語』の信憑性への疑念を引き起こしている。

[3] 「イーゴリの／遠征の　艱苦充てる　物語は／過ぎし昔の　ことばもて／語り出ずる」〔『イーゴリ遠征物語』第 1 節，強調はブリュクネル〕。

[4†] 順に，『イーゴリ遠征物語』第 3 節，第 6 節。

[5†] 同第 5 節。

[6†] 同第 109 節。

[7†] 順に，同第 152 節，第 14 節，第 57 節（初刊本テクスト）。

ツィヤ，ギリシャとモラヴィヤのスヴィヤトスラーフの賞賛者たち[1†]）なのである。『イーゴリ遠征物語』の作者は，自分を真実の詩人というよりは，人工的で冷ややかな詩に向いていると考える人間で，ネストルの『年代記』もよく知っており，その中のダージボグ，ストリーボグ，ホルスの名をあげるヴラジーミルの聖者表（カノン）は，彼に何の痕跡も残さずにはいなかったし，おそらく『聖母の苦難巡り』[2]も彼には無縁ではなかったであろう。したがって，懐疑論者であれば，『イーゴリ遠征物語』の「神話」全体を，読書からの反映（レミニスツエンツィヤ）にすぎないとして，疑問に付すところであろうが，私はその「過ぎし昔のことば」にこだわり，そこに読書からの痕跡以上のものを認めることにしたい。『物語』の作者は，誰かがルギヤ人を「シフィエントヴィトの子供」とあだ名したのとちょうど同じように，ルーシを「ダージボグの裔」と呼んだのであって，ダージボグを同種族の神（デウス・ゲンティーリス）としてのみ考え，たとえばチェルニーゴフのようなどこかの種族に限定してしまうなど問題にもなり得ないのである。

ルーシの民衆はダージボグのことを瞬く間にきれいさっぱり忘れてしまったが，これと同じことが，ペルーンや他の神々についても繰り返された。スヴァロージチの記憶はもっと長く保たれた。この神の居場所が『物語』に見当たらないのは，オヴィーンの火が英雄譚にそぐわないからである。またこの民衆は太陽と火に，ある種の真昼崇拝をも結び付けていて（ただし，私はそれを西スラヴの「真昼の精」崇拝と関連づけようと思っているわけではなく，こちらの方は異教信仰というよりはむしろ詩篇作者の *daemon meridianus*[3†]からおそらく発達したのであろうし，もし史料がわれわれを欺いているのでなければ，16 世紀にはルーシにさえ到達したようなのだが，もっともそれも長く続いた形跡はない——そんなものは今日のロシアのフォークロアには見当たらないのだ），『異教徒が偶像を崇拝していたことについての講話』[4†]にはこんな一節がある。実りと穂の生育の贈与者ナイル川についての言及の後に，ルーシのテクストは，後半はすべて完全ながら前半は損なわれた次のような独自の一文を付け加えているのである。「火は麦角を生み，乾かし，それは熟し（別のテクストでは——そ

[1†] 同 90 節。なお，ブリュクネルの原文は「イーゴリの賞賛者たち」となっている。

[2] 『聖母の苦難巡り』 *Хождение Богородицы по мукам* とは，キリストの苦難の地を巡る聖母の遍歴を記すボゴミール派聖書外典の表題で，スラヴの異教についての後世の書き込みを含む。『スラヴ古代辞典』の「聖書外典」„Apokryfy"の項目を参照。

[3†] 「真昼の悪魔」。『聖書』の『詩篇』第 91 篇，6 節を参照。

[4†] 正確には，『かつて異教徒たる諸民族が偶像を崇拝し，これに生贄を捧げおり，今もまたこれを行いたることについての，注釈に見出されし聖グレゴリオスの講話』。第 2 章（『SLAVISTIKA』XIV，116 頁）を参照。

して神なる火は，ライ麦が乾くと［つまり，オヴィーンで］，そこで麦角［濃密な穀粒］をつくり出し），そのため呪われた者どもは真昼を崇拝し，南〔「真昼」と「南」はともに *полдень*〕を向いて跪拝する。」この挿入部分をアーニチコフは，オヴィーンのもとの地上の，そしてまた穂にやはり麦角をもたらす天空の「火へのルーシにおける崇拝の注釈と解説」と的確に呼んだ（290 頁）。しかし，彼は誤って，オヴィーンのもとで祈禱を受けるこのスヴァロージチが何らかの神では全くなく，捧げられた火なのだと推断し，それ故ヴラジーミルの神々の中には見当たらないのだと考えた。それ故彼はこれをいつもわざと小文字で書き，さらにこう推断を下す。スヴァロージチが火だと知っていたからには，一体なぜ王たる鍛冶屋のスヴァロージチが捏造ではなかったはずがあろう？　王たる神スヴァロージチでは奇異な感じがしたであろうし，ヤーギチのあの説明は裏付けられるのだ。「溶接する[1†]」のは捧げられた火のもとでは奇異ではなく，だから太陽もこのスヴァローグの子と呼べるのだし，スヴァローグそのものが結婚の縁結びとなるのだろう。つまり，竈，オヴィーンのもとの火，婚礼は近い関係にあるのだ。しかしながら，この一連の解釈では，われわれが小文字で書くことは決してしないオーデル川のスヴァロージチ *Zuarasic*[2†]は真っ向から否定されることになるのである。

「ダージボグの裔 *Дажьбожии внукъ*」「ストリボーグの裔 *Стрибожии внукъ*」「ヴェーレスの裔 *Велесовъ внукъ*」〔*внукъ* は「子孫，後裔」，また「孫」の意〕——これらが『物語』の作者が人間に（断じて，四大要素に，ではない。後述部分を参照）与えた呼称である。語られているのは子たちではなく裔たちである。子ではキリスト教の時代にたぶんあまりに衝撃が強すぎることになりかねず，そこでやむなく作者はあの「過ぎし昔のことば」という名目を借りて，子たちに代わる裔たちという言い方を持ち込んだのであろう。ペルーンについての言及もない。作者は実体的な異教，つまりいわば自然異教をことごとく避け，太陽も，風も，ドン川も全く神格化しなかったので，ペルーンにふれる余地はなかったのである。しかし二度[3†]にわたりルーシがダージボグの子孫と呼ばれることの方は，ダージボグがスラヴ・オリュンポスの中でいかに高い地位を占めていたかの証拠であり，たぶん変化をつけるためなのであろうが，一度だ

[1†] 原語は warzyć（= варити）。本章で前出の сварение（溶接，鍛造，動詞 сварити の名詞形）と関連する。

[2†] ティートマルによるスヴァロージチの表記を指す。第 1 章（『SLAVISTIKA』XIII，304 頁）を参照。

[3†] 『イーゴリ遠征物語』第 64 節，第 76 節。

けは[1†]ダージボグの裔の代わりにストリボーグの裔たちについて語られている（数の変化は必ずしも本来的なものではなく，おそらく「風たち」が隣にあるせいで，書き手の念頭に浮かんだのであろう）。あまりふさわしくはない「внукъ」という用語の選択は，たぶんまさしく非本来性の，つまり（本来は，「息子？」「家系・部族？」の）代用の証拠である。家系の関係は文字通りに受け取るべきではなく，部族または身分，（歌い手の）職務の守護神がその始祖と呼ばれるのは，血縁関係がほかのどの関係にも勝るからなのだ。こうしたすべては甚だしい時代錯誤でなのあって，時代にも人々にもそぐわない神や聖人たちについの頑固な沈黙も同様である。ほかの方策を知らない以上，われわれはこれを，かの「ボヤーンのひそみ」[2†]に倣った「licentia poetica〔詩的許容〕」と，いかなる禁欲主義にも反対する叙事詩的精神のなせる業と考えることにしよう。

ここまでは古くから知られまとめられていた事実である。これからがわれわれの推測であり憶測ではあるが，しかしそれは史料に立脚し完全にそれらに依拠したものだ。私の出発点となる前提は，スヴァロージチが，（ヤーギチやアーニチコフが考えたように）年代記作者の単なる虚構でも，小賢しい空論でもなく，実在した神話なのだということと，それが神なる鍛冶屋であり，ダージボグがスラヴのヘーリオスであるのと全く同じように，スラヴのヘーパイストスだということである。だがこのスラヴのヘーパイストスは鋏（やっとこ）や最初の武器，そして夫婦のくびき以上のものを創り出さなかったのであろうか？　その答を与えてくれるのがリトアニアの信仰である。それはわれわれがリトアニア・スラヴの原初の神格ペルクン・ペルーンを規定する際の役に立ったが，神なる鍛冶屋スヴァローグについてももっと多くのことをわれわれに語ってくれるのである。

マララのブルガリア語（「スラヴ語」）訳の，かのルーシの写本には，異教をリトアニアに持ち込んだ，出所不明のソヴィイ *Совии* なるものに関する一節があり，そこではさらにリトアニアの異教の神々が数え上げられている。このわれわれに関係のある一節を，最良の翻刻（ミェジンスキ Antoni Mierzyński『リトアニア神話史料』*Źródła do mitologii litewskiej*，I，ワルシャワ，1892，129 頁）で引用しておこう。（приносити жертву и *перкунови* рекше грому）„и телявели … кузнецю（ビリニュス図書館の写本

[1†] 同 48 節，「見よ／ストリボーグの　裔なる風は」（固有名詞の表記は変更した）。また「裔なる風」は『イーゴリ遠征物語』原文では複数形。

[2†] 同第 2 節。「ボヤーン」は武勲の歌を歌い演奏した 11 世紀の詩人とされる。

では，телявеликъ кузнецъ）сковавше е солнце яко светити по земли и вовергшю ему на небо солнце”。[1†] кузнецъ（鍛冶屋）はリトアニア語の単語のロシア語訳で，雷が*Perkunas*の，雌犬が*żwerine*[2†]の訳語なのと同様であるため，ヴォルター[3]はきわめて正当にも，全く不可解な*мелавель*を*kalwelis*[4†]=鍛冶屋に変えてしまった——ミェジンスキの説明は，*телявель*にこだわりそれを様々に解釈しようとしているが，全く的はずれである。しかもミェジンスキは神話の意味も間違って規定している。彼はマンハルト[5]の例に倣って，鍛冶屋に気づきはしたが，その鍛冶屋は「毎日自分の鍛冶場で，つまり朝焼けの中で，新しい太陽を鍛え」（149 頁），「その住処は——ラトヴィアの『クラクフ人』によれば——炭が撒き散らされているところ，つまり早朝や夕方に朝焼けや夕焼けが燃えているところであり，空焼けは彼の鍛冶場なのだ」（150 頁）としていて，つまり換言すれば，彼はれっきとした神話を平凡きわまりない詩的隠喩にしてしまったのだ。私はこれと意見を同じくしないが，それはこの鍛冶屋がほかの奇跡も実現させたことを知っているからだ。15 世紀の初めに，ジュムチ族の祭司たちがプラハのヒエロニム[6]に，十二宮（原文ノママ）が（冬の）太陽の閉じ込められている塔を叩き割るのに使ったというあの巨大な槌について語っているのである。それ故私は神話を文字通りに理解する。神なる鍛冶屋は地上で鉄板の太陽を鍛え，光り輝くその鉄板を天へ投げ入れた。天上では寒さと雪が太陽を閉じ込めていて，その障壁を通して太陽が青白く力無く地上を見ていると，十二宮の星々ではなく，おそらく神なる鍛冶屋が，大槌で（春雷で？）障壁に穴を空け，太陽を解放した。彼はペルクンの意志の執行者にすぎないのかもしれず，ペルクンの傀儡かもしれないのだが，それにしても，このリトアニアのプロメーテウスは，人類の最大の庇護者となって，生贄を受けるに値する十分な働きをしたのである。

1† 「(ペルクンすなわち雷にも生贄を捧げ)『また，地上を照らすよう，太陽を鍛造して，太陽を天に投げ入れた，テリャヴェル…鍛冶屋にも（生贄を捧げるよう)』」ととる。

2† いずれも語形表記は原文のまま。

3 E・ヴォルターE. Wolter「神話学大要」*Mythologische Skizzen*，『スラヴ文献学論叢』IX，1886，635 頁以降。

4† 語形表記は原文のまま。

5 おそらくW・マンハルトW. Mannhardt『ポーランド人ヨハンネス・ラシキウス〔ヤン・ワシツキ，後述〕のサモギタ〔ジュムチ〕族の神々についての書』*Johannis Lasicii Poloni De diis Samagitarum libellus*，『ラトビア文学学会誌』„Magazin der lettisch-literarischen Gesellschaft”，XIV，リガ，1868。

6 プラハのヒエロニム〔1378–1416〕はチェコの司祭，フスの信奉者で，フスの翌年に火刑に処された。数年間ポーランドとリトアニアに滞在し，かの地の状況の正確な観察を伝えた。

したがってこの神話は原始的で，アーリア人のヘーリオスに関する神話よりはフィン人のカレワラを想起させるものだ。だがわれわれはさらに推測の糸を紡ぐことができる。1249 年，プロイセン人たち（„illi de Pomezania, Warmia et Natangia"[1†]）はクリストブルグにおいて教皇派遣大使の前で，さまざまな異教の祭儀の非難を受けねばならなかったが，その祭儀の中には特にこんなものもあった。„idolo, quod semel in anno collectis frugibus consueverunt confingere et pro deo colere, cui nomen *curche* imposuerunt de cetero non libabunt".[2†]ミェジンスキが詳細な解説の中で正しく指摘していることだが（90 頁以降），プロイセン人もリトアニア人も偶像の神は持たなかったので，idolum を常置の偶像と考えるべきではない。だが，マンハルトの生育の神々にすっかり魅入られていたミェジンスキは，すべてを収穫感謝祭に帰せしめた。「収穫の終わりには（collectis frugibus）生育の神，特に穀物の神を祝して感謝祭が行われた。この神は穂のよく実った畑に住んでおり，取り入れの間に後ずさりして，ついに最後に刈り取られる穀物の束の中で捕まってしまう。*configere* は，穂から作ること，*idolum* は〔穀物の〕ひと山，束，小さな束で，これが神として崇められて *curche* と呼ばれ（…），*kurti* 建設すること，作ることから，*kurkas* 創造者，穀物の生育の守護霊が生まれた。」この語源説では着想全体に欠陥がある。*curche*「creator〔創造者〕」は，以下で見るように「qui fecerunt coelum et terram〔天空と大地を創ったところの〕」神々に属するのであって，ライ麦の鬼神（デーモン）に属するのではなく，私は全く別の方法でこの神とその意味を説明してみよう。プロイセン語の *Kurkas* はスラヴ語の *Korčij*〔*Корчии*〕鍛冶屋（*Kъrčij*〔*Krъčij*, *Кръчии*〕，この二つの語は一字もたがわず対応する）なのである。リトアニア人なら，昔から自分たちの神々の明快な名称が気に入っていたから（マララとヴォルイニ年代記における *medine*〔森の神〕と *žverine*[3†]〔獣の神〕のような名と比較せよ[4†]），不可解な新しい名前は *Kalwelis* に代えてしまうところだったかもしれない。鍛冶屋の意味とその職種については，リトアニア・スラヴ時代にすでに *vъtrъ*〔*вотръ*〕= *wutris* と *autre*（プロイセン語の鍛冶屋と鍛冶場）という鍛冶屋の別の名称の一致が立証している。

[1†]「ポメザニャ，ヴァルミャ，ナタンギャの人々」。いずれも現在のポーランド北部のバルト海沿岸部に住み，13 世紀初めに分離したプロイセン人を指す。ポメザニャはヴィスワ川とノガト川の間，ヴァルミャはヴィスワ湾とウィナ川中流の間，ナタンギャはプレゴリャ川とウィナ川の分岐点に位置した。

[2†]「年に一度穀物を刈り入れた後に作り，クルケという名を付けて神として崇めることになっていた鬼神に，彼らは今後捧げものをしないだろう。」

[3†] いずれも語形表記は原文のまま。

[4†] 第 1 章（『SLAVISTIKA』XIII，309 頁）を参照。

Kurkas がライ麦の鬼神や穀物の鬼神ではなく，中心的神格であったということは，それを創造神に並べ入れている前述の文書だけでなく，その名がプロイセン各地の地名にたびたび表れていることからもおそらく立証される（*Kurksadel*, *Kurke* の居所，*Kurklauken*, *Kurke* の野。神話史料としての地名の意味については，前述部分を参照のこと）。フィン語 *Kurko* 魔法使い，*Kurgo*，エストニア語 *Kuri* にその名が繰り返し現れているのは偶然ではなく，*Perkun* に *Perken* が帰せられたように，その名に帰せられるのではないだろうか？　したがってプロイセン人たちはその非常に原始的な異教の中で，彼らに太陽を贈ってくれた *Kurke*＝鍛冶屋崇拝にとどまっていて，また収穫の後には，ルギヤでシフィエントヴィトを呼び出していたように，これを崇拝していたのかもしれない。つまり，やはり大きな（人体のサイズの）輪形パン kołacz をこねて作り，祭司はそのうしろに回って自分の姿を民衆に見せ，来年はもっと大きな輪形パンを作って自分の姿が見えなくなるよう祈ったのであろう。というわけで，1249 年の文献が伝える情報は，生育の鬼神が結局は属している「下級の」神話に依拠せずとも，きわめて完全に理解しうるのである。

1249 年の文書が語るような供犠はまた，リトアニアの供犠をも思い起こさせる。それは（グヴァグニン[1†]その他によれば），10 月の終りに，刈り入れや取り入れがすべてすんだ後，天の恵みを得たことを謝し，翌年も同じく恵みを給わることを願って，ジェミェニク *Ziemienik*[2†]という神に対して執り行われるのである。とはいうものの，リトアニアではどこにもプロイセンの神クルカス *Kurkas* の名前は現れることはない。ラスコフスキ[3]は，一見したところこの神かもしれない何者かについて次のように言及している。„*Krukis* suum est deus, qui religiose colitur ab Budraicis, hoc est fabris ferrariis"〔「クルキスは豚の神で，ブドライキ *Budraici*，すなわち，鉄の鍛冶屋たちによって敬虔に崇拝されている」〕。鍛冶屋たちが豚を崇拝したというこの風変わりな信仰は何に由来するのだろうか？　ほかの文献では全く知られていない，鍛冶屋を意味するこの名称をグリーンベルガーは *wutraitis* あるいは *utratis* と読むことで，あのプロイセン語の鍛冶屋 *vutris*，教会スラヴ語の *vъtrъ* と同一視しようとした（『スラヴ文献学論叢』XVIII，37 頁）が，これはきわめて疑わしい。しかも，*Krukis* を *Kurkis* に読み換えるのは困難であって，*jauczin baubis* が雄牛のうなり声を意味するのと同様に，*kiauliu krukis* あ

[1†] 第 3 章（『SLAVISTIKA』XV，138 頁脚注）での「グアグニン」と同一人物。

[2†] 以下のリトアニア語の語形表記もすべて原文のまま。

[3] ヤクプ・ラスコフスキはジグムント・アウグスト王の測量士で，職業的用件でジムチ全土を巡回し，機会に恵まれてジムチの神々の一覧表を作成した。これを利用したのがワシツキである。

るいは *kruke* は豚の鳴き声を意味し，ともに 17，18 世紀のリトアニアの文筆家の著作ではリトアニアの神として言及されている。このクルキス *Krukis* の予言能力については語らず，それへの崇拝のみに言及するラスコフスキとは異なり，グリーンベルガーは鍛冶屋を豚の鳴き声から占いをおこなった魔術師と考えているが，これは彼の手前勝手な策謀であって，ラスコフスキも他の史料もその根拠を与えはしない。豚と鍛冶屋とのこの驚くべき結びつきからは，これ以上何の結論も得ることはできないのである。

リトアニア神話の野原の散策からスヴァローグとスヴァロージチに戻ることにしよう。ペルクン＝ペルーンに関してのリトアニアとスラヴの一致によって，神なる鍛冶屋スヴァローグ＝ヘーパイストスは，スラヴ人のもとにあっても，リトアニアにおけると同様の役どころを演じていたという推測が，有力に，あるいは，可能になる。この推測が正しければ，われわれは太古のスラヴ人の信仰を理解する上で大きく一歩前進したことになる。彼らの信仰は，リトアニア人のそれと同様，原始的であって，そのことには驚くべきことは何もない。そこにはギリシア風の仕上がりのよさも，色彩や暖かみも，詩情や美しさも全く欠如しており，そこに反映されているのは，沼や果てしない森の中の灰色の北国的背景における，牧者や農民，蜜飼や猟師，漁夫や鍛冶屋が営む，農業村落的生活様式なのである。13 世紀のリトアニアで存在していたものを，われわれは大胆にキリスト教受容後の数世紀のスラヴ人のもとへと移行させてもかまわない。スラヴ人が神格化したのはスヴァローグが鋳造した太陽の円盤そのものではなかった。彼らが神格化したのは，それを所有していたもの，すなわち，ダージボグだったのである。神話史実説的傾向のある年代記作者が，モデルとしてのヘーリオスとヘーパイストスの関係の故に導き出した虚構でないとすれば，彼らがダージボグとスヴァローグの間の血縁関係を確定したことは，プロイセンやリトアニアに比べ，更なる一歩だったのかもしれない。したがって，鍛冶屋と太陽と火の間には，何らかの絶ち切りがたい絆があるのであり，ここにわれわれはスラヴ神話の中心そのものを見る。この中心の横にはペルクィン＝ペルーンが立ち，さらにその先にようやく，後に見る農業村落的タイプの他の神々が姿を見せるのである。

より後代のルーシの史料のスヴァロージチ＝火に，われわれはスヴァロージチ＝太陽（ダージボグ）のある種の降格化されたものを見出すが，名前そのものが証明するのはさらに別の事柄である。リトアニア神話（プロイセン神話等）は，父親の名に基づく命名法を全く知らない。仮にスラヴ神話にそのような命名法が存在していたなら，われわれがたった今言及したように，神の形象の神人同形化において見るべき前進が

あったことになるであろう。もっとも，スラヴの神々の最高神との血縁関係や近親性の度合いに関するヘルモルドの伝承は，異教ではなくキリスト教の臭いがするが故に，われわれはいささかも重視するつもりはない。スラヴ神話は，神々の擬人化と地上世界の諸関係の天上世界への移行によって，より高度の発達を遂げていたことになるだろう。リトアニア人は，どうやら，神の像を作るにさえ至らなかったようで，少なくとも，重要な史料はこのことについて沈黙している。それに比べ，スラヴ人は外国の影響を全く受けずに神像を建立した。とはいえ，神の像を意味する共通の，スラヴ祖語の名称を，神柱そのものを指すもの以外，実は，われわれは持っていないのである。教会スラヴ語の *кумиръ*（語源不明——外来語か？）も，ポーランド語の *bałwan* も，ましてやチェコ語の *socha* も，その権利を主張しない。*капь*「像」もまた外来語であり，トルコ・タタール起源なのだ。あるいは，このような些事も無視すべきではないのだろうか？

史料不足のため，ダーヂボグ=スヴァロージチと原初のペルクィン *Perkyn* の活動に境界を定めることはできない。そしてペルクィンは，（ゼウスの）ペーゴナイオス *φηγοναῖος*〔オークの木の住人〕のようにあだ名にすぎなかったが，しかしこの神格自体は少なくとも雷の支配者に限定されていたわけではなく，もっぱらこの意味だけが付与されるようになったのは，リトアニア語の *perkun* やポーランド語の *piorun* の後代の狭められた意味に基づいてのことなのである。**Perkyn* は，天空と太陽の主（あるじ）なのであって，嵐や雷だけの主なのではない。リトアニア人はこのような考えを捨てようとはしなかったし，ワシツキやラスコフスキの著作においてもまだ，リトアニア人のペルクン *Perkun* は太陽神，太陽自体なのである。„*Perkuna tete*"[1]は日中の放浪でくたくたになった〔ペルクンを〕水浴させ，さらなる旅路へと送り出した。スラヴ人は新しい太陽神，ダーヂボグを創り出したのであって，ギリシアのヘーリオスを本来持ってはいなかった。彼らにとっては樹木が神ではなく神の宿る場所にすぎなかったように，太陽もまた同様であった。だからこそ，太陽の名称は genus neutrum〔中性〕にすぎず，**сълно*〔太陽，中性名詞〕は *okno*〔窓，中性名詞〕のように作られたのである。リトアニア語の *saule* は女性で，その役割も完全に受動的である。ルーシとチェコの信仰によると，日蝕の際には，魔術師が「それを食べる」（ネストルと古チェコ語の『アレクサンドレイダ』*Aleksandreida* による）。天体自体は一般に，どうやら，大した役割は果たしていないようなのであって，スラヴ人の天体の名称は，たとえば，*бабы*

[1] „Perkuna tete"はペルクンの「母」（叔母）。

〔昴〕，*влосожары*[1]（もっとも，奇妙な偶然であるがスラヴ人の間には *власожелищи*[2] という父称が存在する）などのように，かなり素っ気なく聞こえる。

ニーデルレ（80 頁）はヴラジーミル・モノマフ公にすら太陽崇拝の残滓を見出した！　公が息子たちに宛てた教訓（いわゆる彼の遺言）の中の表現„отдавше богови хвалу и по том солнцю возходящю и узревше солнце и рече"[3]云々を，いかなる偶然からか，彼は中世ロシア語ではきわめてありふれた dativus absolutus〔独立与格〕（「そしてその後，太陽が昇ったときに」）の代わりに，„kus staré věry pohanské, kus stareho ctění slunce… třebas už v ramci křesťanském"[4]として理解したのである。本質的で，文法的誤りに依拠しない二つの天体崇拝については，ルーシとバルカンの教会文献が„аще кто целует месяц, да будет проклят"[5]と語っている。これらほかの引用箇所については，ニーデルレ（78 頁）を参照のこと。

結局のところ，われわれはスヴァロージチの語形自体の説明はこれまで保留してきた。というのも，おそらく本質的には，ギリシア語原典に基づけば，スヴァローグ＝ヘーパイストス・父親，スヴァローグの息子――ダーヂボーグ＝ヘーリオスというあの系譜は，ルーシの注釈者が持ち込んだものにすぎないのであって，本当は，いかなる系譜も存在しなかったのであろう。なぜなら，スヴァロージチとはスヴァローグそれ自体なのであり，スヴァロージチ=ダーヂボグとは，太陽を鍛造し，天空ではこれを支配し，地上では火のなかに現れる，あの天空の鍛冶屋であるからだ。スヴァロージチは父称などでは全くなく，愛称のような原初的指小形なのである。スラヴおよびリトアニアの，神々の，一連の神話的名称は，このような推測を私に思い起こさせる。常にどこでも，神々は指小形，愛称形で呼ばれるものだ。つまり，ラスコフスキとワシツキの著作のリトアニア人は，常に *Perkune dievaite* とは呼んでも，*dieve* とは呼ばず，常に *Bożycu* とは呼んでも，*Boże* とは決して呼ばず，他のあらゆる神々についても，同様に *Waizgante dievaite*，*Gabie dievaite* と呼ぶのであるが，これらは父称でなく，指小形・愛称形なのだ。このようにして，(聖母の)歌に登場するポーランド語の *Bożyc*

---

[1] *влосожары*，*волосожары*（東スラヴ語）は流星，しばしば，昴。

[2] *власожелищи* は昴。

[3]「神に賛美を捧げ，そしてその後，昇りゆく太陽に賛美を捧げ（あるいは，太陽が昇ったときに），太陽を見て，言った」。

[4]「古い異教信仰の鍛冶屋，古い太陽崇拝の鍛冶屋であるが……，とはいえすでにキリスト教の枠組みの中にある」。

[5]「もし月に接吻する者あらば，呪われてあれ」。

やセルビア語等の *božić*＝*dievaitis* に得心がいく。つまり，「神の息子よ」でも，「年若き神よ」でもなく，「〔親しみをこめて〕神よ bożeńku〔神 bóg の指小形 bożeniek の呼格〕」（*bożyk* という，聖母のためにウォシ[1†]が新造した語はありえない）と呼びかけているのである。これに関連して，ポーランド語の *księżyc*〔月〕も，前述の *власожелищи*，つまり昴も，ともに全く父称ではないことがはっきりする。なぜなら，月も昴も誰の子供でもありはしないのだから。したがって，月 księżyc は愛称形の「〔親しみをこめた〕主よ paneczku〔主 pan の指小形 paneczek の呼格〕」なのであって，wielki pan〔貴族，文字通りには「大きな主」の意〕や ksiądz〔古義で，「公」〕，つまり中世にどこでも「主なる太陽 dominus sol」と呼ばれていた太陽に対する mały pan〔小さな主〕ではない[2†]。しかし，私が *paneczku* にこだわるのは，*bożyc* と *diewaitis*（*diewaitis* はリトアニアの地では普通，*Perkunas* と同義である）の類似のためである。つまり，スヴァロージチとスヴァローグは二個の別者ではなく，父と息子でもまたなく，同一のものなのであって，そのことは，太陽を鍛造し天空に懸け，また地上では火を司る鍛冶屋に関するその先の私の説明をぶちこわしにしないどころか，これを強力に支えているのである。というのも，もしまさにスヴァロージチとスヴァローグが同一者であるなら，何故，オドラ川を越えたラドゴシチでも，ルーシでも，スヴァローグではなく，まさにスヴァロージチが呼びかけに用いられたかが容易に理解できるからなのだ。これに対し，もし仮にスヴァロージチが本来，父称であったなら，われわれのもとには類似した事例が不足していることになってしまう。ゼウスをクロニデース[3†]と呼んでもかまわないかもしれないが，しかし，ギリシア全土において，ゼウスは決してクロニデースとしては崇拝されず，そのように呼ばれたこともなく，常に，ゼウスとしてなのである。あたかもスラヴ神話に支配的であるかのごとき系譜的関係に関するヘルモルドの説明は，リトアニア神話もまたまったく支持しておらず，唯一 *Perkuna tete* のみがそのようなものを指し示すようにみえるが，これにしてもペルクンの体を洗い，昼の旅路に送り出すペルクンの召使いにすぎず，そのようなものとして名前があげられているのみなのであって，それ以外の役割を演じてはいない。リトアニア神話に比して，スラ

[1†] Jan Nepomucen Łoś（1860–1928）。ポーランドの言語学者，スラヴ文献学者。

[2†] しかし，ブリュクネルはその『ポーランド語語源辞典』では，księżyc は„mały ksiądz”「小さな公」の意で，„wielki ksiądz”「太陽」（中世に広まっていた太陽の呼称 *magnus dominus*「大きな主」に由来）に対するものとしている。同書„ksiądz”「公」の項目を参照のこと。また，バンコフスキの『ポーランド語語源辞典』も księżyc を„syn księcia”「公の息子」と説明している。同書„ księżyc”「月」の項目を参照のこと。

[3†] クロニデース Κρονίδης は，ゼウス Ζεύς の父の名クロノス Κρόνος から派生した父称形。

ヴ神話の発展は，神々の像の中に顕著な，より精密な神人同形論的方向へと限定されていったのかもしれないが，前述の通り，それらの像を表わすスラヴ祖語の名称をわれわれは知らないのである。リトアニア語においても，そうした名称はなく，*stabas* は何事も証明はしないし，*ełkas* はさらに問題外である。

したがって，スヴァローグ（鍛冶屋たる父親）とスヴァロージチ（太陽たる息子，火）の二つではなく，スヴァローグと呼ばれ（カシュブ地方の *Swarożyno* と比較せよ），また情愛的愛称的指小形ではスヴァロージチと呼ばれた一つの神話的形象があったのであり，後者によって本来の形は使用されなくなってしまったのであるが，これはスラヴ語においては常に見られる過程であって，*ojciec*〔父〕，*palec*〔指〕，*słońce*〔太陽〕，*owca*〔羊〕などの指小形のために *otъ*[1]，*palъ*，*sołno*，*owъ* などのことが全く忘れ去られてしまったのである。

仮にサクソンがあげた語形ポレヌチウス *Porenutius*[2†] をそのようにして復元すべきであったならば，われわれはルギヤ島のペルニツ *Perunic* もこのように容易に理解できたであろう[3]。つまり，（ニーデルレには反対することになるが，98 頁）ペルニツはペルーン *Perun* の息子としてはまるで何の意味もなさず，またどこかほかにそのようなものがあるなどということも私は知らないのだが，しかし，仮にこの名前をそのように読みとることが確実でさえあれば，ペルニツすなわちペルーン自身という理解は，スヴァロージチ＝スヴァローグと同様，きわめて妥当であろう。とはいえ，おそらくルギヤ島のペルニツにも，キエフのペルーンにと同様，北欧のトール *Thor* が影響を与え，蘇生を促したのであろう。なぜキリスト教が常に *bożyc* という呼び名を——ポーランドとバルカンにおける若干の痕跡を除き——常に避けていたのかを，われわれはもう理解できるであろう。この *-ic* という接尾辞にはあまりにも異教神の呼称のにおいがしたので，むしろこれは「神の息子」だということにしておこうとしたのである。

（スヴァローグ）スヴァロージチ・ダージボグ，神なる鍛冶屋（？），火と太陽が一つの形象であることは，より複雑で，原始的ではないスラヴ人の信仰の存在を最もよく立証している。火崇拝に関しては，アラブ人の証言に依拠することもできるかもし

---

[1] 「*otъ*...」は *ojciec*，*palec*，*słonce*，*owca* の推定的非指小形である。

[2†] この語と次のペルニツについては，第 3 章（『SLAVISTIKA』XV，138 頁）を参照。

[3] R・ヤコブソンは「比較神話学における言語資料の役割」の中で *Porenutius* = *Perunic* の比較を確実（？）とみなしている。〔この文献についてはS・ウルバンチク『アレクサンデル・ブリュクネルとその神話学の業績』（『SLAVISTIA』XII，170 頁）を参照。〕

れないが，それはそうした証言が旅商人風のでたらめで一杯ではなく，また民族と国を混同したりしていなければの話である——それ故そうしたものはそれが存在した年代にも関わらずわれわれは引用しないことにする。同じことについてかなり多くのでたらめを近年の学者たち，たとえばヤンコも述べている。彼はイランからとやら称する影響を何度か否定してはいるが，にもかかわらず（224–226 頁），火崇拝では（スキタイを介しての）そうしたものなしですますことができず，また，いくつかのスラヴ語方言では，それが後代の，局所的なものにすぎないにも関わらず（決して「全スラヴ」でもなく，ましてや「原スラヴ」でもない！），*watra*「火」というイラン語起源の名称が現れるからとの理由から，「スラヴ語の *ogień* 火は火打ちして作られた火，つまり男性に身近な神を意味し，一方，女性名詞の *watra* からは竈の火，つまり女性に身近な神という観念が強められた」と思っているようだ。私がこれを引用するのは，神話学的空想のぞっとする見本としてのことにすぎない。スヴァロージチも，ダージボグも，一つの形象の二つの名前であり，同時に火と太陽の神なのであった。では，この二つのうちどちらが古いのだろうか？　私の見解では双方が等しく古く，違うのは起源だけのことにすぎず，スヴァロージチは鍛冶屋の神話を示し，ダージボグは作用を意味しているのだ。14 世紀にリトアニア人たちを *πυρσολάτραι*，つまり火の崇拝者とギリシャの総主教が呼んだように，かつてはその同じ名前はスラヴ人たちにも（アラビア語の史料を参照せよ）名乗る資格があったのである。通行できない森を焼き，夜にはあらゆる獣を追い払い，湿った穀物を乾かし，煮炊きや暖房や照明に役立つ火は，経済活動においても日常生活においても，もちろん巨大な役割を果たしていた。スヴァロージチとだけではなく，ダージボグとも，火が呼ばれていた（マララの注釈からそうなってしまったようだが，太陽だけがそう呼ばれていたわけではない）ことを，ウクライナの方言やベラルーシのフォークロアは証明している。ウクライナ人，たとえばポレセツ人たち полесцы は火のことを一般にバハチ *багать* と呼び，またベラルーシ人はある期間（復活祭の間，農地での労働の時期）にバハツエ *багатце* と呼んで，財産を失ったり，凶作に見舞われたりしないように，その時には火の貸し借りをしない。室内の照明用に薪や炭化した木の根を燃やすための火皿が下についた，いわゆる「竈（コミン）」を用いる場所で，「トマスの」週[1†]に「竈を結婚させる」，つまり竈を白く塗って青草で飾り，火の中にラードかバターのかけらを投げ入れるのである。こ

[1†]「聖フォマーの週」（復活祭から始まる光明週間の翌週）を指す。大斎期（四旬祭）に禁じられていた婚礼と歓楽が許される時期とされる。

れは火の供犠の明らかな名残である。しかし最も興味深いのはベラルーシのボハチ *богач* であって，これは秋分の日あたりの，たとえば聖母マリア降誕祭〔生神女誕生祭〕の頃に当たり，その日を単にボハチと呼ぶ（これは「小聖母祭」と呼ぶ代わりなのであり，「大聖母祭」は8月15日，聖母マリア被昇天祭〔生神女執心祭〕を指す）。ボハチの記述をA・ボグダノヴィチにより（『ベラルーシ人における古代世界観の残滓』，123–125頁），文字通り，要約ではあるが，引用してみよう。バハチ *багач*，ないしバハトツエ *багатце* は，ライ麦の皮に蠟燭を差したもので，丸一年の間イコンの下に立っている。バハチの日にはそれに火をつけ，バハチの立っている家に司祭を呼び，祈禱を唱えさせる。すると今度は，家の主がバハチを一番近い隣人の所まで運び出す。そこでは戸外に白いテーブルクロスに覆われ，様々な穀物の皮（これは後で教会の使用人が集める）を載せたテーブルが出してある。バハチはそれらの皮の間へ置かれ，司祭は祈禱を執り行い，司祭とそのお供は室内に招かれてもてなされ，バハチはイコンの下の「上座」に置かれ，このように順番に家をまわるのである。そうしているうちに村中の家畜が追い集められる。これがすべての百姓家を回ると，バハチが家畜の周りをまわり，その後にそれをその年の当番の百姓家まで運び入れ，その中にバハチは丸一年置かれ，百姓家に富と成功をもたらすのである。バハチのライ麦と蠟は更新は，毎年のこともあれば（畑にライ麦を播き，最初に刈り取られた束のライ麦を脱穀する），また年ごとの当番がすべての百姓家を一巡し，蠟燭が燃え尽きたときになってようやくなされることもある。蠟燭は，収穫感謝祭の歌に似た特別な歌をともなう共通の晩餐会のために作られる。

先に，神 *богъ* = deus という語がダージボグ *Дажьбогъ* から派生したということについて言及した。*багач*，*багатце*（火を示す同義語）の中にはこのことを示す最良の例があり，主として古い史料に依拠するこの説明にはフォークロアは原則として含めていないにもかかわらず，ここではそれをあげておいた。

したがって，われわれは敢えてスヴァロージチ＝ダージボグをスラヴ神話の頂点に据えることができる。一方ドニエプル沿岸とオーデルの対岸におけるスヴァロージチの名称の形そのものの一致は，スラヴ人の信仰の一体性を何より雄弁に語る証拠であり，また同時に，少なくとも東スラヴにとってのイランの火崇拝の影響を重視しようとする者（ニーデルレその他）に対する，何より効果的な抗弁になっているのである。火崇拝はリトアニア＝スラヴ起源のものであり，ペルクン信仰に次ぐ第二の重要な共同の所産である。後に数々の名称が分岐し，リトアニアでは神が他のものと同様，甚だしく分化したということは，上述の主張と矛盾するものではない。われわれはスヴ

アロージチのヘーパイストスとしての意味を——全く仮説の領域に入ることではあるが——神なる鍛冶に関する神話の，そしてまたリトアニア＝スラヴ神話の構成に利用したのである。もっとも，スラヴの側においてこの仮説は非常に脆いものであるということを認めるのに吝かではない。疑わしきものは自由を宿す。（イン・ドウビイース・リーベルタース）

訳者付記

「神話は，何らかの目的をもって作者によって作られたただの虚構にすぎないように思われていた」（カーメンスキー『神話学入門』，菅原邦城・坂内徳明訳，東海大学出版会，1980，6頁）。「神話」が「虚構」に過ぎないものであるならば，それは作者によって自由自在に解釈され，可能な限り広がりゆくものといえよう。しかし一方で「神話」は，それが真理とみなされる対象ではなくなったときから成立すると考えられている。そのように考えたとき，民衆の観念から一人歩きした「虚構」はすでに「神話」とはなりえない存在となるのだ。

それに対して，「神話」の本質はアレゴリーであるとする「神話学」の立場が存在する。事実，「神話」の神々は常に自然現象や倫理規範のアレゴリーとして解釈されることが試みらていた。たとえばギリシャ神話において，エンペドクレースは，ゼウスを火，ヘーラーを空気，ハーデースを大地，ネスティスを水のアレゴリーとして位置づけている。同様にホメーロス以前，ギリシャ哲学者たちによっては，ゼウスは空，ポセイドーンは海，アポローンとヘーパイストスは火と解釈されていた。

近代ロシアの詩においてもスラヴの神々を題材に書かれた詩は存在し，そこではギリシャ神話の神々にスラヴの神々を近づけようという試みがなされていた。たとえば，スヴァローグ，ダージボグについて，バリモントは歌っている。

スヴァローグの名前をもつ空よ，	Небо, носящее имя Сварога.
至高の青いステップたる空よ，	Небо, верховная степь голубая
太陽，ダーヂボグを生んだ空よ，	Небо, родившее Солнце, Дажьбога,

「スヴァローグ」，詩集『火の鳥』（1906）所収。

この詩にあるようなスヴァローグとダーヂボグは親子であるという関係は何を論拠にしているのか。バリモントが親しんだ書物，アファナーシェフの『スラヴ人の詩的自然観』では，マ

ララースの引用の中に，ヘーリオスはダーヂボグと翻訳されていたことを見いだすことができるとし，ネストルや『イーゴリ遠征物語』で言及されているダーヂボグについては，アポローンがゼウスの息子に当たると同じように，太陽，天空の息子に当たるとの記述がなされている（A. A. Афанасьев, *Поэтические воззрения славян на природу*, т. 1, M., 1995, 34 頁）。アファナーシェフは，「スヴァローグは時には陽光を輝かせたり，雨雲に覆われ稲妻を光らせたりする空の擬人化であり，我が国の史料の指摘によれば，太陽と火の父とみなされていた。雨雲の中では雷光を発し，そのようにして空の火の創造者となった。地上の火は，言い伝えによると，雷光という形で地上に降ろされた神の贈り物であり，そこからスラヴ人は火をスヴァローグの息子として崇拝したことが明らかとなる」（同書，67 頁）と述べている。

一方，ブリュクネルの解釈では，スヴァローグがヘーパイストス（父親）で，ダーヂボグはヘーリオス（スヴァローグの息子）という系統関係はルーシの注釈者が持ち込んだものに過ぎない可能性がある，とされる。また，ギリシャ神話のヘーパイストスに相当するスヴァローグとスヴァロージチについても，鍛冶屋たる父親であるスヴァローグと太陽たる息子，火のスヴァロージチという親子関係は存在せず，それらの形象は一つのものであるとし，スヴァロージチはスヴァローグの指小形だという事実がないがしろにされていると，主張している。

ダーヂボグはスヴァローグであると同時に火と太陽の神，スラヴの主神格であり，自然の単純な擬人化ではないとするブリュクネルの結論は，アファナーシェフの考えとは大きな隔たりがあるように思われる。彼らの意見を異なるものにしている要因は，「虚構」を「神話」とみなすかどうかに由来しているといえよう。　（寒河江　記）